

## 専修大学法科大学院視察結果概要

- 1 日時  
平成26年4月24日(木)午後3時40分から午後5時45分まで
- 2 場所  
専修大学大学院法学研究科（法科大学院）
- 3 出席顧問  
納谷座長，阿部顧問，有田顧問，橋本顧問，吉戒顧問
- 4 法科大学院概要説明  
別紙1のとおり
- 5 授業見学  
「刑事実務演習」清水登教授  
「企業ガバナンス法務」潘 阿憲教授
- 6 教員との意見交換会
  - (1) 教員の出席者  
石村院長，佐野副院長，宮岡入試委員長，梶村自己点検委員長，田中常務理事，小崎事務部長，及川主任
  - (2) 概要  
別紙2のとおり
- 7 学生との意見交換会
  - (1) 学生の出席者  
人数5名  
(内訳)  
2名（3年生・未修・法学部出身）  
2名（2年生・未修・法学部出身）  
1名（1年生・既修・非法学部出身・社会人経験あり）
  - (2) 概要  
別紙3のとおり

## 専修大学法科大学院（概要説明）

### 【入学定員・志願者数について】

- 法科大学院発足時は定員60名だったが、現在は未修25名、既修30名の定員55名となっている。
- 平成24年度の志願者数は、212名、25年度は114名、26年度は95名である。うち入学手続をした者は、平成24年度は41名、25年度は29名、26年度は19名（入学者）である。

### 【専修大学法科大学院の特徴】

- 授業は学生に議論させるようにしている。ほとんどの授業を小さな教室で行っているので、学生は必ず何か発言しないとならない。
- 法科大学院発足当初から合格率が減ってきているが、本学が誇れるのは、全員が就職していること（法律事務所がLS内にあり、リーガルクリニックの場として活用でき、学生の就職先にもなっている）。学者になった者もいる。きめ細かい教育の成果である。今後も小さな法科大学院のメリットを活かしながらやっていきたい。
- 本学はこの校舎で自己完結している。同一建物には図書館もある。
- 一年次では法学の基礎知識と理論を学修し、二年次には演習等により実践的な問題解決能力を養い、三年次になれば文書の起案と発表をできるように教育している。一クラス20名程度で、理念どおりの教育を行っている。

### 【課題について】

- 一昨年から志願者が減っており、定員割れを起こしている。入試でどれだけ優秀な学生を確保できるかが近年の悩みである。そのため、昨年から入試制度を変え、スカラシップ入試を導入したが、同制度での合格者が他のLSに行ってしまう、定員を確保できていない。

## 専修大学法科大学院（教員との意見交換）

### 【司法試験合格率向上に向けた取組みについて】

- 受験に関する指導は意図的に避けてきた。テクニックに走る受験指導はまずいが、問題点を見つけ出し、文書を書いて、相手に伝える能力は、法律家として必要だと思っており、その指導を行っている。
- 合格者をどれだけ出せるかが課題である。発足当初より、合格率が減ってきているので、我々もきちんと教育しなくてはならない。
- 今後も小さな法科大学院のメリットを活かしながらやっていきたい。
- 専修大学の法学部から入学した者は、合格率が高い傾向にある。

### 【予備試験について】

- （司法試験予備試験の開始の前後で授業に対する学生の学習意欲について、）変わっているという意識はない。
- 在学生で予備試験を受験しているのは、数名というレベルであり、他に悪い影響はない。むしろ、予備試験は、法科大学院志願者への影響が大きい。法科大学院を避ける方向になっている。予備試験に合格した者の方が優秀というような報道もあり、法科大学院にマイナスなイメージがついてしまい、そちらの影響の方が大きい。
- 予備試験合格者については、過去に、修了せずに退学したことがあった。

### 【教育全般（課題や対応等）】

- モチベーション維持については、クラスの担任として前期後期に面接を行っている。本学は極めてGPAが厳しく、GPAが低いと進級・修了ができない。
- 展開先端科目は三年次にあるものが多いが、司法試験にない科目でも、修了後のことを考えて、学生は必死に勉強している。
- 弁護士を増やすためではなく、法曹を幅広く配置するという理念があるのだから、弁護士希望者が転職先や年収の確保をするのが困難だから（司法試験合格者を減らすべき）という方向でのネガティブキャンペーンは止めてほしい。国としては、法科大学院で学んだことがこれだけ役立つということのアピールに取り組んでほしい。

## 専修大学法科大学院（学生との意見交換）

### 【将来の見通し】

- 将来は民事の弁護士になりたい。（2名）
- 将来は法律を学生に教える仕事をしたい。
- 上からではなく、横に並んで何かを一緒に考えられる法曹という意味で、少年部の裁判官になりたい。
- 報道されるような犯罪に憤りを覚え、こうした事件を少しでもなくしたい、犯罪者を裁きたいと思い、検察官を志望している。

### 【入学動機】

- 自分の出身大学の法科大学院よりレベルが高いこと
- 家から近いこと、自習室があること、合格率・就職率が高いこと
- 志望動機は、自習室があること、少人数教育の方針、先生が熱心なこと
- 他の法科大学院を修了し、司法試験を受験したが三振したので、入学。
- 奨学金制度が整っていたこと、家から近いこと、先生が熱心なこと
- 自習室（キャレル）やゼミのスペースなど、個と団体の場面を使い分けるスペースがあること
- 学部も専修であり、先輩が多数いたこと、少人数制の授業であること、自習室が一人一人に割り当てられていること、奨学金をもらえたこと

### 【司法試験、予備試験の受験について】

- 試験対策として、短答対策は自分でやるしかないもので、スピードを上げていく練習をしていきたい。論文は自主ゼミでやっていきたい。
- 法科大学院でも試験対策は行っても良いと思っている。法科大学院に来ているのは司法試験に合格するためなので、もっと試験対策の授業を行って良いと思う。（4名）
- 法科大学院が試験対策を行うと、旧試験の弊害が復活する危機感があるので、対策は行うべきでないと考えるが、個人的に試験対策はやってほしい。
- 1名は今年の予備試験を受験予定。他の4名は今後も予備試験を受験する予定なし。

### 【法科大学院の教育について】

- 満足度は高い。少人数なので、双方向の授業が行われており、教え方が丁寧である。不満は、課題が多いので、自分の勉強とのバランスをとる必要があること。
- 予備校の勉強だと、論証を暗記したり、型にはまった浅い学習になってしまう。法科大学院では、深く掘り下げて検証し、理解度を高めることができ、満足している。
- 授業はソクラテスメソッドで行われており、授業の予習をしてきても、授業中、想定外のことを問われることもあり、教師との間で緊張感を保つことができ、自分を伸ばすことができる。